

第2章-2. キリスト教

1. 「旧約聖書」とユダヤ教

※キリスト教の「旧約聖書」 ≡ ユダヤ教の「聖書」

天地創造から始まるイスラエル人の歴史がヘブライ語で書かれている
創世記・出エジプト記 etc.

<イスラエル人 (=ユダヤ人、ヘブライ人) の歴史>

BC.1200 頃 「出エジプト」 ……エジプトで奴隷的状况にあった一派が、
預言者 モーセ の指導によりエジプト脱出 (旧約書「出エジプト記」)



この時モーセが、唯一神 ヤハウェ から 「十戒」 を授かる → ユダヤ教のはじまり

- ※特徴
1. 一神教、偶像崇拜禁止
 2. 選民 思想 ……イスラエル人のみが救われる
 3. 十戒を中心とする宗教上の様々な 「律法 (= トーラー)」 をイスラエル人が守れば、民族の繁栄が神に約束されている
= 神と民族との間に 契約 が成立している、と考える。

BC.11c. パレスティナにヘブライ王国成立、首都エルサレム

第2代 ダヴィデ、第3代 ソロモン の時繁栄

BC.922 ヘブライ王国、南北分裂

イザヤ、エレミアなどの 預言者 が出現し、信仰の強化を説く

BC.586 「バビロン捕囚」

新バビロニアにより王国滅亡、民衆がバビロンに連行される



BC.538 アケメネス朝ペルシアにより解放され首都エルサレムに神殿を再建

ユダヤ教の確立 …… 「聖書」 (≡キリスト教の「旧約聖書」) の成立

救世主 (ヘブライ語で メシア) を待望しつつ、民族の復興を願う

しかし次第に形式化 …… 律法 主義

律法を守ることを極端に重視する パリサイ派

2. イエス (BC.4 ~ AD.30)

パレスティナ北部のガリラヤ地方ナザレの人

30 才頃に、預言者ヨハネから、洗礼 (バプテスマ=罪の清めの儀式) を受け、
福音 (=神からの喜ばしい知らせ、エヴァンゲリオン) を説き始める。

①. ユダヤ教の律法主義を批判する。

マルコ第 2 章 17 「医者を必要とするのは、丈夫な人ではなく、病人である。

わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招くためである。」

※「罪人」=ユダヤ教では、律法によって罪人として差別されている人々を指す。
イエスは律法こそが差別の根源である、と考えている。

②. 「神からの無差別の愛」 (=ギリシア語で アガペー) を説き、人々もそれに応えて、 神への愛、隣人愛を実践すべきであると説いた (とされているが...)

「心を尽くし精神を尽くし思いを尽くし力を尽くして主なるあなたの神を愛せよ」
「自分を愛するようにあなたの隣人を愛せよ」

しかしこの部分に関しては、ルカ」 20-25 にあるように、

律法主義者：「律法の中で何が一番大事か」、イエス：「聖書には何とあるか」

そこで律法主義者が上 2 つを答えたので、イエスが「わかっているなら、そうしなさい。
(律法によって貧乏人いじめばかりしてないでさあ)」 と軽くあしらったのである。

マタイ第 5 章 43-44

「あなたがたも聞いている通り、「隣人を愛し、敵を憎め」と命じられている。

しかし私はあなたがたに言う「敵を愛し、自分を迫害する者のために祈れ」

「隣人」という言葉は、ユダヤ教世界においては「ユダヤ教徒同士」を指す。

権力者が「敵」を作り出し「敵を憎め」と人々に教え込むことに対する反抗として
言われた言葉なのである。

つまり、イエスは「隣人愛」の教えなど説かなかった!

隣人愛はユダヤ教の教えであり、イエスがわざわざ言うこともなかった。

③. 「神の国」

・イエスが「神の国はあなたがたのうちにある」と言ったのは、

あなた方の手の届く範囲にありますよ、という意味である。

イエスは「神の国」について問われて次のように答えた。

「あなた方農民の生活がそうじゃないですか。種をまいた後は、ただ寝たり起きたり
していれば自然と実を結ぶ。それが神の国じゃないですか?」 (マルコ 4 章 26-29)

つまりこれは、「律法を守らないと神の国に入れない」と脅しつけてくるような
宗教のあり方に対する痛烈な批判なのである。

<イエスの刑死>

AD.30 イエス、十字架にかけられ刑死

- ・ 権威・権力に反抗するイエスは、ユダヤ教指導者たちのみならず、ローマ帝国支配にとっても危険人物

※新約聖書の4つの福音書全てにおいて、「ローマ帝国から派遣された総督ピラトは、イエスの処刑に消極的だった」ように書かれている。しかし十字架刑はローマ帝国の処刑方法である。聖書は、ローマ帝国民から「キリスト教は帝国の犯罪者の宗教」と受け取られないように、事実をねじ曲げて書かれている。しかし、イエスが十字架刑で殺されたことだけは、目撃者も多く、隠しきれなかったのである。

<キリスト教の発生>

イエスの死後、彼の名による教えを受け継ぐ、と称する様々なグループが生まれた。

その中で、「イエスの復活」を信じ、イエスを救世主（ギリシア語でキリスト）と見なすグループが、次第に今日「キリスト教」と呼ばれている宗教になっていく。

3. パウロ

もとの名はサウロ

パリサイ派に属し、キリスト教徒を迫害していたが、突然 回心 する。

以後、おもにローマ帝国東部のギリシア人社会に、キリスト教布教
その過程で多くの書簡を著す→「新約聖書」に収録

※彼によって確立されたキリスト教の教義の根本

人間は生まれながらにして罪深い存在である。 = 原罪 (生まれながら持つ罪)
↓
罪のない神のひとり子として生まれたイエスが、その全人類の罪を、
十字架にかけられ「いけにえ」となってあがなって下さった。 = 贖罪
↓ (罪をあがなうこと)
このことを信ずる者が、罪から救われる (救済)

※「人間が義とされるのは、律法の行いによるのではなく、信仰によるのである。」
(正しい) (「ローマ人への手紙」第3章28)

※キリスト教の三元徳 ……「コリント人への第1の手紙」第13章-13

かくして、いつまでも残るものは 信仰 と 希望 と 愛 である。
その中で最も大いなるものは 愛 である。」

4. ローマ帝国の国教化

- 313年 ミラノ勅令 ……コンスタンティヌス帝による公認
325年 ニケーア公会議 ……アタナシウス派の**三位一体説**が正統とされる
=父なる神、その子イエス、聖霊が一体である
392年 テオドシウス帝により国教とされる
ほぼ同じ頃、キリスト教独自の聖書（**新約聖書**）の確定

5. 教父哲学 教父…初期キリスト教の教義を確立した指導者たち

◎ アウグスティヌス (354-430) ……主著「神の国」「告白録」

北アフリカ・チュニジア（旧カルタゴの地）に生まれる
母はキリスト教徒だったが、これに反発して放縦な生活。マニ教に惹かれる。
ミラノ司教アンブロシウスに傾倒して、キリスト教徒となる。

新プラトン主義とキリスト教思想の統合（“イデア界”を「神の国」に置換）
人間の自由意志は無力であり、神の恩寵なしには善をなしえない

パウロの三元徳（信仰・希望・愛）にギリシアの四元徳（知恵・勇氣・節制・正義）
を従属させて7つの徳とする

→ ギリシア思想（**ヘレニズム**）とキリスト教（**ヘブライズム**）の融合

6. 中世スコラ哲学

イスラム教世界との交流を通じて、アリストテレス哲学が流入

↓

普遍論争……実在論（アンセルムスら）と唯名論（アベラールら）の対立

┌ **実在論**……普遍（類の概念≡イデア）は実在する（プラトンの）
└ **唯名論**=普遍の概念は名目にすぎず、個物だけが存在する（アリストテレス的）

ロジャー・ベーコン（1214-94）による実験・観察の重視

◎ トマス・アキナス (1225-74) ……主著「神学大全」

信仰の優位性のもとに、信仰と理性の調和・統合を図る。

普遍は、神の知性においては「事物に先だって」存在し、

世界の中においては「事物の中に」存在し、人間の知性においては「事物の後に」存在する。

→自然界を理性で観察する中で、神の印を見いだすことが可能。

理性による個物の研究は、個物の創造主である神を知る手段として有効。

しかし神そのものを知るには信仰によるしかない。

その後、ウィリアム・オッカム（1290-1349）により唯名論優勢